てのひらサイズの童話集　～現在ふたつめ～

たいらひろし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
てのひらサイズの童話集　～現在ふたつめ～

【Ｎコード】
Ｎ１８４７Ｚ

【作者名】
たいらひろし

【あらすじ】
■一話あたり原稿用紙２０枚以内におさめた、さくっと読める短い童話集です。週に一度くらいのペースで更新していく予定です。なお、個々のお話につながりはありません。一部、ｐｉｘｉｖの小説サイドに掲載しているものを転載しております。■今回のお話は日本が舞台。日本へ異文化交流にきている人魚の少女に、海辺の村の少年がとあるお願い事をします。

第一話　人魚のハープと少年と

人魚のアマレットは浜辺の人気者。彼女の奏でるハープは海の宝石を削って作ったもので、きれいな音色を奏でます。腕のいい奏者、アマレットの名前を、その村で知らないものはいません。今日も漁師さんや、薬売りの夫婦や、子供たちがわざわざ浜辺までやってきて、彼女の演奏にききほれていました。

そんなアマレットに、村の少年、藤吉が声をかけました。

「おまえ、どこからきたんだ」

「私は、ずっとずっと遠くの海からきたの。そこではあなたたち人間の髪の毛も、私と同じように金色なのよ」

アマレットがかわいらしい声で答えます。アマレットは自慢のハープをたくさんのひとにきいてもらうため、この日本の海へとやってきたのでした。

そんな彼女へ藤吉がいいます。

「なあ、お前に頼みごとがあるんだ。その楽器を俺に貸してくれないかい。家に持って帰って、おっかあにきかせてやりたいんだ」

アマレットはびっくりして答えました。

「だめよ。とても大切なものだし、このハープは人魚でないとひけないの」

「なら、おれの家へきて、おっかあの前で演奏してくれねえかな」

「それもだめ。私には足がないもの。陸のうえを歩けないの。それより、お母さまにここへきていただいたらどう？」

「できないんだ。おっかあは足が悪いんだよ。ここにきたくてもこられないんだ」

「まあ」

足のないアマレットには？足が悪い？ということがよくわかりません。けれど、その場所から動けないということがつらいだろうということは想像がつきます。

「しかたない。むりをいって悪かったよ」
藤吉は落胆したように丘へと戻っていきました。
その夜、アマレットは波間にたゆたいながら、夏の星座を見あげつつじっと考えました。
「藤吉のお母さまにわたしのハープをきいてもらうには、どうしたらいいだろう」
東の空が白むまで考えて、ふとアマレットはいいことを思いつきました。
次の日、アマレットの姿は村のどこにもありませんでした。村人たちが一生懸命探しましたが、どうしてもみつかりませんでした。
「故郷へ帰っていってしまったのかねぇ」
と、村のみなは寂しがりました。

それから一年がたち、二年がたちました。アマレットがいなくなってしまったことを除いて村は変わりなく、のどかで平和でした。
少年だった藤吉は、たくましい若者へと成長していました。
彼は広い背中に母親をおぶって、浜辺への道を歩いていました。母親に海を見せてあげたくなったのです。
「ここにな、おっかあ。アマレットっていう人魚がいたんだよ。あの子が弾く楽器がすごくきれいな音色でなぁ」
「お前は本当にその話が大好きだねぇ」
穏やかに母親が答えました。
「おっかあにも、きかせてやりたかったんだ。でもそのころおれはまだ小さかったから、おっかあを背負えなくってな」
籐吉が残念そうにいったそのときです。浜辺のほうから、なにやらにぎやかな音楽がきこえてきました。ハープの弦を弾く音のほかに、笛を吹く音。太鼓をたたく音。まるでお祭りのようです。
「なにごとだろう」
籐吉が不思議に思いながら音のするほうへ向かうと、浜辺にたくさんの人魚がいました。サンゴで作った木琴や貝殻のカスタネット、

竹筒のフルートを使ってコンサートをひらいています。村人たちはその周りに集まって、人魚たちの演奏にききほれていました。

「あ、藤吉だ」

唖然とする藤吉に、そういってほほえんだハープ奏者はアマレットでした。アマレットはきれいな娘へと育っていました。背も高くなり、金色の髪も伸びていますが、その澄んだ瞳は変わっていません。

アマレットはいいます。

「あなたのお母さまに音楽をきかせたくって、一度、故郷に帰って、仲間たちにここへきてくれるようにお願いしたの。これだけたくさんの楽器があれば、お母さまの住むおうちまで、音が届くでしょう？」

アマレットの無邪気なアイデアは、残念ながら正しいとはいえません。ここは潮風の吹く村。たとえこれだけたくさんの楽器があっても、きっと藤吉の家まで音は届かないでしょう。そのことを、アマレットは知らなかったのです。

でも藤吉はアマレットの優しさがとても嬉しかったのでした。それにお母さんは、大きくなった藤吉に背負われて、ここにいるのです。

「じゃあ、始めましょう。ここはとてもすてきな村だから、みんな、しばらくここにいるっていってるわ」

たくさんの観客たちの喝采を受けながら、人魚たちのコンサートは幕を切りました。

彼らは音楽が大好き。

藤吉の村にくればいつでも、遠い異国のにぎやかな音楽が迎えてくれるのです。

第一話　人魚のハープと少年と（後書き）

作者のたいらひろしと申しますｍ（＿）ｍ　普段はｐｉｘｉｖというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ（・∀・）【ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｍｅｍｂｅｒ．ｐｈｐ?ｉｄ＝１１３１２６２】

坊やのくれたはがき

郵便配達員の中村さんがたくさんの郵便物をバイクにつんで郵便局を出発しようとしたところで、ちいさな男の子に呼び止められました。

「郵便やさん。このはがきを届けてちょうだい」

「うん？　どれどれ」

見ると、はがきのあて先は市内の病院となっています。

「お母さんが入院してるんだ。本当は会いにいきたいんだけど、僕の家からじゃ歩いていけないんだよ」

病院はここからずっと北にいったところにあります。市内とはいえ、子供の足では歩いていくのは難しいでしょう。

中村さんは坊やからはがきを受け取ると、明るい笑顔でうなずきました。

「わかりました。なるべく早く届けましょう」

中村さんはすぐにきびすを返して郵便局へと、とって帰りました。そして、まだ局内で作業をしていた竹田さんにお願いしました。中村さんは南町の担当。病院のある北町の担当は竹田さんなのです。

「竹田さん。ひとつ、お願いがありまして」

そういって、中村さんは竹田さんにはがきを渡しました。

竹田さんが不思議そうな顔をします。

「うん？　このはがき、消印がついていないじゃないですか」

「お客さまから直接、あずかってきたんです。どうでしょう、やってくれますか」

「いいですよ」

竹田さんはふたつ返事で快諾してくれました。竹田さんはいいます。

「午前中に病院の近くまで配達にいくので、ついでに届けてきます」

お礼をいうとすぐに、中村さんは町中に配るたくさんの郵便物を

持ってバイクで出発しました。あのはがきだけではなく、郵便やさんはたくさんの、たくさんの郵便を町中に届けなければならないのです。

配達中、中村さんはあのはがきのことが気になってしかたがありませんでした。

「竹田さんは、もうはがきを病院へ届けてくれたかな。あの子のお母さんは、もうはがきを読んでくれたかな」

そうして午前中の配達が終わり、お昼休みになりました。中村さんが食堂と向かうと、今度は竹田さんのほうから声をかけてきました。

「中村さん。さっきのはがき、たしかに病院へ届けましたよ」

「助かります」

「では、こんどはあなたの番ですね」

そういって、すっと差し出された竹田さんの手には、一通のはがきが乗せられていました。あて先は、中村さんの担当の南町となっています。

「？　これは……」

「病院であずかりました。坊やのお母さんからだそうです」

中村さんが驚いてはがきを裏返すと、やわらかな字体でこう書いてありました。

『もうすぐお兄ちゃんになる守くんへ。さみしい思いをさせてごめんね。ママは』

そこまで読んだところで、苦笑を浮かべた竹田さんに止められました。

「いけませんよ中村さん、お客さまのはがきを読んでは」

「これは失敬。それにしても、ずいぶんはがきの返事が早いですね。今日の午前中に届いたはずなのに」

「お母さんもおなじタイミングではがきを書いていたらしいですよ」

「ああ、なるほど」

どうやらメッセージを届けたいと思っていたのは、坊やだけでは

なかったようです。
お昼休みが終わり、中村さんははがきをかばんへしまうと、うきうきした気分でバイクにまたがりました。
――さあ、笑顔を届けにいこうか。
坊やの家へ向かう途中、大きな桜の木とすれ違いました。春の風に舞う薄桃色の花びらが、まるで暖かな雪のようでした。

坊やのくれたはがき（後書き）

作者のたいらひろしと申しますｍ（＿）ｍ　普段はｐｉｘｉｖというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ（・∀・）【ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｍｅｍｂｅｒ．ｐｈｐ?ｉｄ＝１１３１２６２】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1847z/

てのひらサイズの童話集　～現在ふたつめ～

2011年12月16日21時53分発行